

ガラテヤ書3章1－14節 「信仰による御霊」

1A 御霊を受けたガラテヤ人 1－5

2A 信仰による義 6－14

本文

ガラテヤ書3章に入ります。私たちは、パウロのこの手紙の「教理」の部分に入ります。教理というのは、真理の教えのことです。これまでの1－2章は、彼が受けた証しについてが大半でした。教える前に、自分がいかに神から啓示を受けて、信仰による義を伝えているのかを弁明していました。ここから、ガラテヤ人に向かって、まっすぐに語ります。

1A 御霊を受けたガラテヤ人 1－5

1 ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。2 ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。

パウロはいきなり、「ああ愚かなガラテヤ人。」という言葉を使っています。とても強い言葉ですが、それだけの深刻な問題の中に彼らが入ってしまったからです。パウロは、他の教会に対する手紙とは異なり、挨拶においても、彼らのことを主にあって祝福する言葉がありませんでした。突然、本題に入っていきました。なぜなら、すべての祝福の基から彼らが離れてしまっていたからです。恵みによる救い、信仰による救いから離れてしまっていたからです。パウロは一連の、信仰による救いを語った後でようやく、4章12節で、「お願いします。兄弟たち。」と彼らのことを信仰のつながりのある友として語っています。

そして、ここの「愚か」というのは、知恵遅れのような愚かさ、馬鹿だという言葉ではなく、「考えれば分かるものを、なぜ考えないのか？」という嘆きに近い意味合いを持っています。例えば父親が息子が誰かを傷つけて警察に捕まったら、「馬鹿者！お前はなんということをしたのか？」と怒っている時のような、そうした言葉です。主は、預言者エレミヤによって同じようにユダの民を呼ばれていました。「4:22 実に、わたしの民は愚か者で、わたしを知らない。彼らは、ばかな子らで、彼らは悟りがない。彼らは悪事を働くのに賢くて、善を行なうことを知らない。」

そして、ガラテヤ人たちは、十字架に付けられたキリストを、目の前にはっきりと示されていたとあります。まるで、「ジーザス」の映画か、「パッション」の映画を見ているかのように、視覚で見えたのでしょうか？そのような幻の中でキリストの十字架を見たという記述は、新約聖書には見当たらないので、おそらくは視覚ではなく、信仰によってまざまざと、その情景を見させられたということ

だと思えます。コリント人への手紙第一に、パウロはこう書いています。「なぜなら私は、あなたとの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。…そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。(1コリント 2:2,4)」パウロが語ったのは、十字架の言葉でありました。そして、それ以外は説得力のある言葉を使いませんでした。しかし、御霊が力強く現れて、十字架のキリストを目で見るようにはっきりと知らせたのです。

そして彼らは、そこまでの体験をしたのに、「だれがあなたがたを迷わせたのですか」と言っています。この言葉は、「まるで催眠にかかったかのようになってしまった」という意味合いがあります。パウロは、彼らがあまりにも容易く、速やかに福音の真理から離れてしまった、衝撃を受けて、どうしたらよいかと悩んでいるのです。

そして 2 節には、「あなたがたが御霊を受けた」とあります。使徒の働きには、数多く、御霊を受けた人々が出てきます。聖霊が弟子たちに下って、それでペテロの説教を聞いたユダヤ人たちが心が刺されました。ペテロは答えました。「使徒 2:38 悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」実際に彼らが聖霊を受けたという、その記述はありませんが、受けたのでしょう。そして、サマリヤの人たちがピリポの福音宣教によって、主イエスの御名を信じました。そしてエルサレムから使徒たちが遣わされて、彼らに手を置くと、彼らが聖霊を受けました(8:17)。それから、異邦人である百人隊長コルネリオがいます。彼とその家族が、ペテロの語る福音を聞いていました。こう書いてあります。「使徒 10:44 ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。」これと同じように、ガラテヤ人は福音を聞いて、キリストの十字架がはっきりと示されて、そして信じて、そして同時か、あるいはその後で御霊を受けたものと思われれます。

そして大事ななのは、それが律法を守っていたから受けたのか、それとも信仰をもって聞いたからなのか？ということでもあります。もちろん、後者です。信仰をもって聞いたから、それで御霊がお降りになったのです。今のコルネリオがまさにその証でした。彼は異邦人です。確かに神を恐れている人でした、祈りも捧げていました。けれども、割礼は受けていなかったし、ユダヤ教に改宗していなかったのです。ペテロの福音の言葉を聞いて、それを信じたからこそ、聖霊を受けたのです。

つまり、ここで何が言いたいのでしょうか？「私は、これこれをしなければ、クリスチャンの祝福にあずかれないのではないか？」と考えることは間違っているということです。自分が十分に罪深い、至らない、この状態ではやっていけないとっていて、「ある程度、しっかりとしてから、信仰告白をして洗礼も受けようか。」と考えているのであれば、そうではない、ということです。それでは、御霊による祝福は受けることはできないのです。

そうではなく、自分の心をそのまま神の前に持っていき、ありのままの自分を神に見ていただき、そのままのあなたで神のところに行きます。問題は、きちんとできてないということではないのです。そうではなく、きちんと素直になれていない、ということなのです。これまで、いろいろな服を自分に着せて、これが自分だと思わせて歩んできました。けれども、キリストの十字架は、自分はキリストを十字架に付ける程に罪深い者なのだ、ということをおもひにも明らかにします。このことが認められないので、キリストの所に来ることができていないのです。問題は、自分の行ないがきちんとできていないではなく、悔い改めて信じていないということでもあります。ユダヤ主義者のように、「何かをして、それから信じる。」のではなく、「そのまま信じて、それから主が何とかしてください。」なのです。

3 あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。

ガラテヤの信者は、御霊によって始まりました。御霊によって始まるというのは、信仰によって始まることです。自分が何かを神の前で達成したのではなく、むしろ神がキリストにあって救いの備えを成し遂げてくださったので、それを受け入れて信じたから、聖霊が働いてくださっています。ところが、彼らは、これからは、自分たちの律法の行ないで神に認められるようにしていったのです。それが、「肉によって完成される」ということです。律法の行ないによっては、自分が行なったこと、達成したことによって、神から祝福を受けるという原則が働いています。しかし、恵みによっては、神が行ってくださり、備えてくださったことを信じて、受け入れ、その中に留まることによって祝福を受けます。霊的に成長するというのも、それを行なっていることです。「2ペテロ 3:18 私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長なさい。」

私たちはしばしば、御霊による導きではなく、何かをしようとしています。御霊による導きは、必ず、主がキリストによってくださったこと、その恵みに留まることによって始まります。「ローマ 8:3-4 肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださしました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。」そして、「コロサイ 2:10 あなたがたは、キリストにあって、完全なのです（満ち満ちているのです）。」とあります。この方にあって自分が完全である、それ以上、自分を改善することはできない、そのキリストの義以上のことを付け加えることはできません。

ですから、何もしていなくても満足なのです。しかし、主はその一方的な恵みを受け、愛を受けた私たちの心を動かし、聖霊の導きを与えられます。この方が命じられることに自分を従わせて、それで生活します。何か認められるために求めるのではなく、すでに認められたから、義と認められたから、その感謝と喜び、愛の応答の現れとして動きます。ところが、何かをしていって、それで主が何とかしてくださいるように、その承認を求めることを行なっていきます。それが肉によって完成

させることです。ですからマリヤのようではなく、マルタのようになってしまいます。イエス様のために、給仕をやっているのですが、「いろいろともてなしのために気が落ち着かず」、イエス様のみもとに来ています(ルカ 10:40)。けれども、最も大切なことを忘れていました。それがマリヤの行なっていたことですが、イエス様のひざ元で御言葉を聞いていたことです。

4 あなたがたがあれほどのことを経験したのは、むだだったのでしょうか。万が一にもそんなことはないでしょうが。5 とすれば、あなたがたに御霊を与え、あなたがたの間で奇蹟を行なわれた方は、あなたがたが律法を行なったから、そうさせたのですか。それともあなたがたが信仰をもって聞いたからですか。

パウロは、「むだだった」という言葉をしばしば使いますね。これは、主にあって建て上げられるのではなく、主から離れてしまうことを意味します。4章 11節でも同じ言葉を使っています。「あなたがたのために私の労したことは、むだだったのではないか、と私はあなたがたのことを案じています。」それを彼は、「4:19 私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。」と言っています。子供として大人に向かって成熟するのではなく、なんと再び誕生しなければいけないような状況になっている、ということです。彼は、テサロニケ人に対して同じ言葉を使っています。「1テサロニケ 3:5 そういうわけで、私も、あれ以上はがまんができず、また誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけないと思って、あなたがたの信仰を知るために、彼を遣わしたのです。」

パウロは、そんなことがあってほしくないと非常に案じながら、「万が一にもそんなことはないでしょうが」と言っています。そして改めてまた問い直しています。神が御霊を与えられ、奇蹟まで行なわれた時に、それは律法を行なったからではなく、信仰をもって聞いたからですよ？と尋ねています。先ほど見た通り、使徒の働きに出てくる人々は、神の言葉を聞いて、それから聖霊を受けたり、また奇蹟を経験したりしています。そこに、自分がある程度の霊的状态に達したから、そうだったのだという記述はないのです。

ですから、私たちは問わないといけません。「なぜ、自分は祝福されないのだろうか？」神の祝福を十分に受けていないと感じる時に、それは自分が十分に祈っていないから、ではないのです。そうではなく、主がおられること、この方が祝福したいと願っておられること、このことを信じて、喜んで受け入れていないから、そうなっているのです。神が祝福されるということを信じていないから、祝福されないのであって、自分ができていないから祝福されないではありません。このことを上手に話している部分が、ローマ 9章の最後の部分です。「9:30-32 では、どういうことになりますか。義を追い求めなかった異邦人は義を得ました。すなわち、信仰による義です。しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした。なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行ないによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまりきの石につまずいたのです。」

2A 信仰による義 6-14

そこで次から大きな話題にパウロは取り組みます。ユダヤ人の父祖である「アブラハム」です。パウロは、ローマ人への手紙でも4章で取り扱いましたが、ここガラテヤ書でも3章と4章に渡り、取り組んでいきます。

6 アブラハムは神を信じ、それが彼の義とみなされました。それと同じことです。7 ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。

ユダヤ人にとって、アブラハムの子孫であるということはその信仰の根幹をなしていました。なぜなら、アブラハムの子孫に神は祝福を約束しておられたからです。主はアブラハムに、「創世 12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。」と言われました。したがって、ユダヤ人はイエス様と議論している時も、「私たちはアブラハムの子孫であって、決してだれの奴隷になったこともありません。(ヨハネ 8:33)」と反論しています。そして主はアブラハムと契約を結び、割礼がその契約の印であると命じられました。したがって、ユダヤ人は第一に血縁関係で自分たちがアブラハムの子孫であるからこそ、神の国に入れると信じていました。そして第二に、異邦人であれば割礼を受け、律法を守ることによってアブラハムへの祝福が彼らにも分け与えられると信じていました。そこで、ユダヤ主義者は、イエスがイスラエルのキリスト、救い主であることを信じましたが、異邦人については割礼を受け、律法を守ることで彼らの神の国に入れると教えていたのです。

しかし、パウロはその主張に対して、直球で勝負します。「アブラハムは神を信じ、それが彼の義とみなされました。」と言っています。アブラハムは、彼が神に義と認められたのは、彼が何らかの自分の義を積み上げたからではなく、神を信じたからそうだったことを思い起こさせています。創世記 15 章に出てきますね、彼には子孫によって祝福されると神から言われていたのに、一向に一人も子に恵まれていませんでした。自分のしもべが跡取りになるのでしょうか？と主に申し上げたところ、主は、彼を外に連れ出しました。上を見上げたら星空です。そして、こう言われました。「創世 15:5-6 さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」大事なのは、このことはアブラハムが割礼を受けるように命じられるはるか前に起こった出来事です。つまり、アブラハムがまだ無割礼であった時に、すでに彼は義と認められていました。つまり、神に認められるその基準は、割礼の有無ではないことが分かります。その要素は、あくまでも「神を信じた」というところにあるのです。

そこでパウロは、「信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。」と言っています。つまり、信じるということであればそれは異邦人もできることであり、ユダヤ人だけでなく異邦人も、無割礼のままでも信仰によって義と認められるということでもあります。

ここで間違っはいけないのは、血縁関係によるアブラハムの子孫、ユダヤ人との関係がなくなつたということではありません。そのことについては、ローマ 9 章から 11 章において、血縁関係によるアブラハムの子孫、イスラエル人についての神の取り計らいについて書いてあります。彼らは決して見捨てられたのではなく、今もその選びと召命は変わっておらず、主は終わりの日に彼らを救われます。しかし、それであっても彼らも信仰によって義と認められなければならない、もし福音を拒むのであれば、彼らも滅んでしまいます。終わりの日に、彼らもイエス・キリストに対する信仰をもって、それで救われるのです。つまり、アブラハムの子孫はあくまでも信仰共同体が本質であり、血縁関係にある選びも神は尊んでおられますが、本質は信仰共同体なのです。

「信じる」ということは、私たちの中核に位置するものであると、宗教改革者のルターは話しています。神を信じるということは、礼拝を成り立たせ、従順を成り立たせ、犠牲も成り立たせる。信仰がなければ、神はご自分の栄光を現わさないし、知恵、真実、憐れみを私たちに示すことはない。人の第一の務めは、神を信じ、信仰によって神を敬うことだ、と言っています。¹

そして、「義と認められる」ということも私たちは、その関係が不思議であります。私たちが、神に認められるために、私たちのほうで頑張るのではなく、神が完全な義をキリストによって示されたこと、それに信頼する時に、私たちは不義であっても、神は義とみなしてくださいます。なぜなら、その義は私たち所属の義ではなく、キリストご自身の義であり、その義を私たちに贈り物として与えられたからです。このことをいつも思い出すべきですね。私たちは不足を感じる時、不完全を感じる時、それでも完全な神は私たちを完全な者としてみなしておられるという事実です。この矛盾を解決する方法は、神の恵みです。神の公義にしたがえば、私たちは神の怒りを受けるべき存在です。しかし、神の恵みに従えば、キリストの義にかなう祝福を私たちが受けることになります。

8 聖書は、神が異邦人をその信仰によって義と認めてくださることを、前から知っていたので、アブラハムに対し、「あなたによってすべての国民が祝福される。」と前もって福音を告げたのです。9 そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。

ユダヤ人たちは、創世記 12 章 2 節にある、「あなたは大きいなる国民となる」という、アブラハムの血縁の子孫への祝福に拘っていましたが、実はその次の 3 節に、こうあります。「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」このように、アブラハムに対する祝福は、イスラエルに留まらず、全ての異邦人への祝福と広められたのです。ここの箇所は、異邦人がユダヤ教に改宗することによって、彼らが祝福を受けるのではなく、信仰の原理によって祝福を受けるようになっていたということです。

アブラハムの生涯については、いろいろな特徴があります。彼は富んでいた人でした。後に割礼

¹ https://www.blueletterbible.org/Comm/luther_martin/Gal/Gal003.cfm

を受けます。では、彼の富につながって、彼の祝福を私たちも共にするのでしょうか。「アブラハム財団」に私たちが入金するのでしょうか？違いますね。そして、アブラハムが割礼を受けたので、割礼を受けた者たちがアブラハム共同体を持つのでしょうか？違う、と言っています。飽くまでも、「信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受ける」であります。アブラハムが神を信じたというところに、祝福の共同体が広がっているのです。

10 というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」

パウロは、信仰の共同体から、次に対比として律法の生活について語ります。「律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにある」とまで言っています。祝福ではなく呪いを受ける、とあります。実はこのことは、ユダヤ人自身も薄々分かっていたことです。律法の全てを守ることはできないことを彼らも知っていました。ですから、そのつながりを血縁関係に求め、また割礼を受けてさえいれば救われるように調整していたのです。しかし、パウロは直球で、律法の本質を説き明かします。

ここで誤解してはいけないのは、律法そのものが間違っているということではありません。例えば詩篇にはこのようにあります。「1:1-2 幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。」この「教え」とは、律法のことです。したがって、律法そのものが悪いものではなく、主との歩みの中で、神を愛する時に、私たちは神の命令を守ります。しかし、ここでパウロが注目しているのは、「神の前に認められるためには、律法では呪いしかもたらされない。」ということです。神に義と認められた者たちが、御霊によって新しくされ、神との愛の関係でその命令を守ることではなく、神に認められるべく、神の命令を守ろうとするその試みは、呪いにしか至らないということでもあります。

パウロは、申命記 27 章 26 節にある言葉を引用していますが、ここで大事なのは、「すべてのこと」と、「実行」の二つであります。つまり、一部ではいけないのです。神の命令について、自分のできるところだけを守ろうとする、その他のところはおざなりにする、ということであってはならないのです。自分の好きなところだけ取って、それだけ守っていれば安心だではないのだよ、ということです。そして、「実行」ですが、ただ知っているだけではだめなのです。そして「その御言葉、大好き」と言って、御言葉を愛しているだけでも駄目なのです。「やってみよう」という意欲でもだめです。知っていても、愛していても、意欲や意図だけ持っても駄目です。実際に行なっていないといけません。だから使徒パウロが、ユダヤ主義者らに向かってこう言いました。「使徒 15:10 それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの先祖も私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。」

11 ところが、律法によって神の前に義と認められる者が、だれもないということは明らかです。「義人は信仰によって生きる。」のだからです。12 しかし律法は、「信仰による。」のではありません。「律法を行なう者はこの律法によって生きる。」のです。

ユダヤ人の聖書そのものの中に、義と認められることについての啓示がありました。アブラハムが神を信じて、義と認められたということの他に、「義人は信仰によって生きる。」という言葉が、ハバクク書の中にあるんですね。彼らの聖書に、正しい者というのは、律法ではなくて、神を信じ、神の言われたことを信じて受け入れる、その信仰が義とみなされているのだということが啓示されているのです。この預言者ハバククは、ユダの国がバビロンによって滅びることについての啓示を受けた時に、極悪の国がなぜユダの悪を裁くのに用いられるのか、さっぱり理解できませんでした。しかし、主は、「それでも待て。遅くなることはない。」と言われて、そして正しい者は信仰によって生きると言われたのです。わたしを信じなさい、それが義人の生き方なのだ。ということです。

対して律法はどうかと言いますと、信仰によるものではありません。神とその言葉を信じて、受け入れることではなく、何かを行なうことが律法だからです。パウロはレビ記 18 章 5 節を引用して、律法というのは行なうことを示しています。ところで、信仰には行ないが伴います。行ないのない信仰は死んだものだと言コブは言いました。けれども、その逆はありません。行なうことは信仰になりません。親に向かって小学校の子どもが、「私は、一生懸命自分で働いて、お父さんを喜ばせます。」と言ったところで、親は「やめてくれ！」と言うでしょう。親が養うことを信じていないのです。自分で働くことで認めてもらうことと、親を信頼することは相容れないことは分かるでしょう。このように、行ないによって認められようとする行為は、神を信じていることにならないのです。むしろ、不信を示していることでしょう。

13 キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである。」と書いてあるからです。

ここからが福音です。律法によっては、神に呪われた者になることしかできません。しかし、キリストが身代わりに呪いとなってくださいました。「贖い出」すというのは、身代金を支払うことです。奴隷として捕えられた者のところに行き、身代金を払って買い戻すことを意味します。それによって、その束縛から解放されることを意味します。キリストが、私たちを呪いから解放してくださいました。私たちのため、私のために呪いとなってくださったのです。ここに愛があります。

どのようにかと言いますと、ご自身が呪われた者になることによってです。申命記 21:23 に次の律法があります。「その死体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならない。木につるされた者は、神にのろわれた者だからである。あなたの神、主が相続地としてあなたに与えようとしておられる地を汚してはならない。」これは十字架刑ではありません

んが、人々が丁重に埋葬されることによってその人の尊厳が保たれます。木に吊るされるということは、非常に侮辱された状態です。しかも、主は夜まで木に吊るしておくで相續地が汚れるから、その前に取り外しなさいとまで命じています。このことも、主の十字架にあって成就しました。アリマタヤのヨセフが日没前に、自分のための墓に彼を埋葬しました。

14 このことは、アブラハムへの祝福が、キリスト・イエスによって異邦人に及ぶためであり、その結果、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるためなのです。

律法によっては、ユダヤ人でさえが義と認められず、呪われます。ましてや異邦人は呪いの下にありました。しかし今はキリストが呪いとなられて、呪いが取り除かれました。そこで、残されているのは祝福です。「キリスト・イエスによって異邦人に及ぶため」とあります。ユダヤ人だけでなく、信仰の原理によって異邦人にも及びます。そして、信仰の結果として「約束の御霊を受ける」とありますね。そうです、それが初めにガラテヤ人に話していたことでした。彼らが受けた御霊は、約束されていた御霊です。使徒 2 章に、ペテロがヨエルの預言として引用した御霊の約束です。またイエス様が十字架に付けられる前の夜に、弟子たちに「もうひとりの助け主」の約束を与えられた、その御霊です。私たちは御霊によって、あらゆる霊的祝福、キリストにある天にある祝福を受けています。このことを、もっと知ることができるようにしたいですね。アブラハムの信仰にならって、その信仰によって聖霊の働きをどんどん受けていきたいです。

もう一度繰り返しますが、信じるとは何かをして獲得するものではありません。むしろ神がしてくださったこと、キリストによってしておられることを受け入れ、それに応答するということです。神の恵みの中に留まることです。